柳幸典つなぎプロジェクト成果展 2021 Beyond the Epilogue

石の割れ目から聞こえる言霊（ことだま）

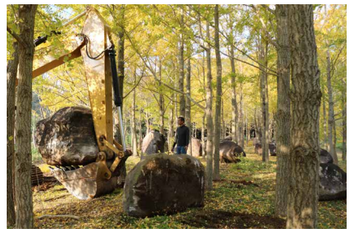
柳幸典つなぎプロジェクトの3年目の成果展が、9月11日(土)からつなぎ美術館で始まりました。社会問題に独自の視点で切り込む作品で知られる柳さん。事前調査で町を訪れたときに、水俣病の惨状を描いた作家の石牟礼道子（いしむれ）さんや写真家のユージン・スミスさんの作品を展示する施設がこの地にないことに衝撃を受け、石牟礼さんの文学にちなんだ大型展示を企画。石牟礼さんの詩などを基に役場近くの森で《石霊（いしだま）の森》、旧赤崎小学校舎を利用した《入魂（にゅうこん）の宿》を手がけました。

《石霊の森》は、石の中から言霊（ことだま）が聞こえる様子を表現した作品。利用されなくなった憩いの森とそばに放置された無数の石から着想し、さまざまな形の石を人間の多様性に重ね合わせています。石に近づくと被害者の語りや町民による石牟礼さんの詩の朗読、郷土民謡「平国六方踊り」の演奏と歌が聞こえてきます。この踊りは約200年前から伝わったといわれ、力自慢の侍が刀を抜いて喧嘩しそうになるのを、別の侍がなだめて仲裁する物語。水俣病をめぐるさまざまな問題にもつながると思い採用したそうです。

《入魂の宿》は旧赤崎小学校のプールと周辺を宿泊施設に改修。水中に下るスロープも付け、海の浄化が自然界の微妙なバランスで成り立っていることを体感できるそう。敷地内には再生した海や空の景色を取り入れる作品を設置し、公害を見つめ瞑想に浸る空間を新しく作り出します。作品名は石牟礼さんの詩「入魂」から引用。柳さんは「『海に魂が入る』と表現するところの海と天が結び合う瞬間を描いた美しい詩の世界を、地域資源の再生で造形できれば」と語りました。

《石霊の森》に響く地域のさまざまな事象を伝える音を時間をかけて収録

石の配置を終えた後も重機械による細かい作業が進む《石霊の森》



《石霊の森》で柳さんの指示で重機械で大小さまざまな石を配置

柳幸典つなぎプロジェクト成果展 作品紹介

石霊（いしだま）の森

津奈木町役場近くに植林されていたイチョウの森と、同じく利用目的がなく保管されていた大量の玉石を利用し、鉱物と植物そして人間の言葉を組み合わせて造園するプロジェクト。

四季と共に変化し成長していくイチョウの森の中に点在する大小さまざまな形の石の割れ目から、老若男女による石牟礼道子さんの詩の朗読などがひそかに聞こえてくる。それら珠玉の言霊は、まるで硬い石の封印から解き放たれたかのようである。

柳幸典《石霊の森》2021年

入魂（にゅうこん）の宿

旧赤崎小学校のプールとその周りを芸術体験ができる宿泊施設として改修し、敷地全体をアートで再構成するプロジェクト。プールを再活用することで、小さな動植物たちの箱庭的生息空間を育てると同時に、自然環境の壊れやすさについて体感してもらうための装置として機能するように設計。「入魂の宿」の名前は石牟礼道子さんの詩「入魂」から引用。2022年度からは期間限定で1日1組の宿泊ができる予定。

《入魂の宿》イメージ図 制作：工学院大学樫原研究室

10月下旬公開予定で工事が進む《入魂の宿》

《入魂の宿》に住民と美術館が育てたハーブなどをみんなで一緒に植樹

美術館 YouTube チャンネル

動画公開

新型コロナウィルスの影響で、無観客で行った「柳幸典つなぎプロジェクト成果展 2021 Beyond the Epilogue」関連企画の「対談 姜尚中×柳幸典」。10月中旬に美術館 YouTube チャンネルで公開予定です。右のQRコードを読み取ってください。